



Title	苫小牧研究林で観察されたオジロワシの繁殖失敗の事例と近隣で実施された温泉試掘調査の影響
Author(s)	奥田, 篤志
Citation	北方森林保全技術, 42, 22-24
Issue Date	2024
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93953
Type	departmental bulletin paper
File Information	2023_42 (4).pdf



I - 4 苫小牧研究林で観察されたオジロワシの繁殖失敗の事例と 近隣で実施された温泉試掘調査の影響

奥田 篤志

苫小牧研究林

はじめに

苫小牧研究林において 2013 年にオジロワシの営巣が確認され、繁殖状況の確認を継続的に
おこなってきた。2022 年度からはオジロワシを含む希少猛禽類の繁殖モニタリングが基盤調
査課題となり、業務としてモニタリングする体制が整備された。

苫小牧のオジロワシの繁殖成績は非常に良く、2013 年以来連続して繁殖に成功していた。
2022 年の春は繁殖の兆候は見られていたが産卵に至らず、繁殖に失敗した。その後営巣地の
周辺でリゾートホテル建設に関連する温泉試掘調査が行われていたとの情報があった。この調
査が繁殖失敗の原因ではないかと考え、営巣木に設置した自動撮影カメラの画像の分析結果と
調査の日程に関する情報からオジロワシの繁殖失敗について考察した。

苫小牧研究林におけるオジロワシの営巣

苫小牧研究林では 2000 年秋に林内でオジロワシのペアが目撃され、林内で営巣の可能性が
示唆されていた。2007 年 6 月にはウトナイ湖方面から苫小牧研究林方面に餌を運ぶ成鳥が観
察されていた。その後、2013 年 4 月にオジロワシの営巣が確認され、2021 年まで連続して繁
殖に成功していた。

2019 年の繁殖終了後から営巣木に自動撮影カメラを設置し、繁殖ステージの把握と巣に運
ばれる餌動物の記録などを開始した。また、2020 年の繁殖終了時には巣が半壊したが、新た
な巣材が積まれず営巣放棄が示唆されたことから、北海道教育委員会に天然記念物の保全に関
して助言を受け、巣を人為的に補修して 2021 年の繁殖が成功していた。

自動撮影カメラによる記録と温泉試掘調査

2022 年 1 月 9 日に自動撮影カメラを設置し、オジロワシのペアの飛来が初めて撮影された
のは 3 月 7 日と非常に遅かった。この要因の一つとして、積雪が多かったことが挙げられる（写
真.1）。一方、カメラの設置から初めてワシが撮影されるまでの期間が長かったのは、カメラ
のセンサー感度が適当でなかった可能性がある。



写真.1 巣に積もった雪（2022/2/25）

初飛来以降撮影回数は徐々に増え、3月18日に28回撮影された後3月20日と23日に4回まで減るなど変動が大きかった。3月25日に38回と最大値となり4月8日まで比較的多く記録されたが、4月9日以降急に撮影回数が減り、19日以降0回となり繁殖失敗と判断した(図.1)。

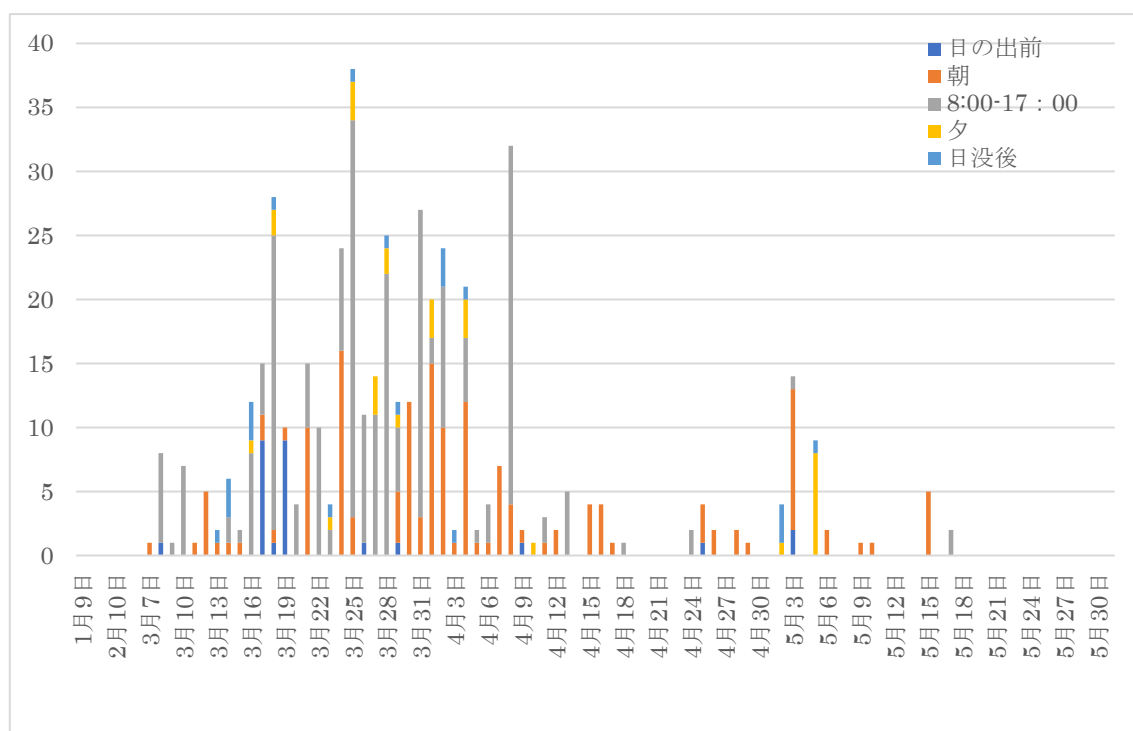


図.1 時間帯別撮影回数

その後、営巣地に隣接する民有林におけるリゾートホテル建設関連の温泉試掘調査の情報が得られた。情報を調べると、2022年3月11日に温泉試掘調査が公表されていた(苫小牧民報)。また、2022年4月15日には高さ28mの櫓の建設など、調査の規模が判った(苫小牧民報)。後日、巣から直接櫓が視認できることを確認した。櫓の建設地点はオジロワシの巣から直線距離で約1,700m離れているが、標高が25m高いため樹高を超えた櫓は丸見えの状態であった。自動撮影カメラで得られたオジロワシの撮影情報から温泉試掘調査の影響の有無を検証するため、温泉試掘調査の作業日程に関する情報の提供を受けた(奥田 私信)(表.1)。

表.1 温泉試掘調査の日程

作業内容	作業期間	作業時間帯
機器設営	2022/03/23~04/11	8:00-17:00
温泉井戸掘削	2022/04/12~04/29	0:00-24:00
解体	2022/06/30~07/12	7:00-16:00

この作業日程が正しいと仮定してオジロワシの撮影データを見ると、機器設営が始まる数日前から、午前8時以前と17時以降の作業がおこなわれていない時間帯の撮影が多く見られた。また、24時間体制で温泉井戸掘削がおこなわれた期間の撮影回数は平均1.56回で、5日間連続で撮影されない事もあった。このことから、温泉試掘調査がオジロワシの繁殖失敗の原因と判断した。

まとめ

今回のオジロワシの繁殖失敗事例では、もう少し早い時点で周辺環境の異変に気付けた可能性がある。新聞記事でも温泉試掘調査について触れられており、調査に気付くことはできた。また、定期的に目視による観察を実施していれば、櫓の建設や作業騒音が把握できたと考えられた。自動撮影カメラに頼り過ぎ、観察が疎かになったことが最大の反省点と言える。

これらの反省点を踏まえ、今後の猛禽類の繁殖モニタリングにつなげたい。自動撮影カメラによる観察をおこなう場合、カメラの画角、センサー感度など、効果的な設置方法を検討するが、カメラデータはあくまでもサブデータと考え、定期的な目視観察が重要である。